

花のかきり

特 252

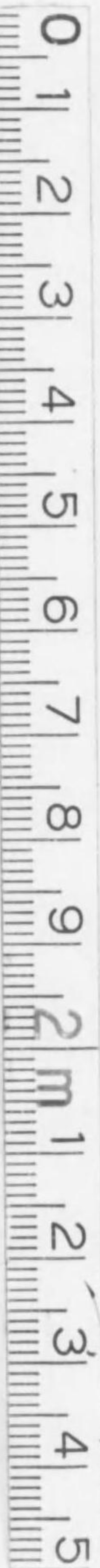
737

本願寺パンフレット一〇五二號



30
5

寺願本派本



始



特252
737

花
の
か
を
り



本
派
本
願
寺



年を経て

いよ／＼深く身に沁むは

心の花のかをりなりけり

佛教婦人会聯合本部總裁紅子方御題詠

二十五のわが

紅子

しききぬまこと

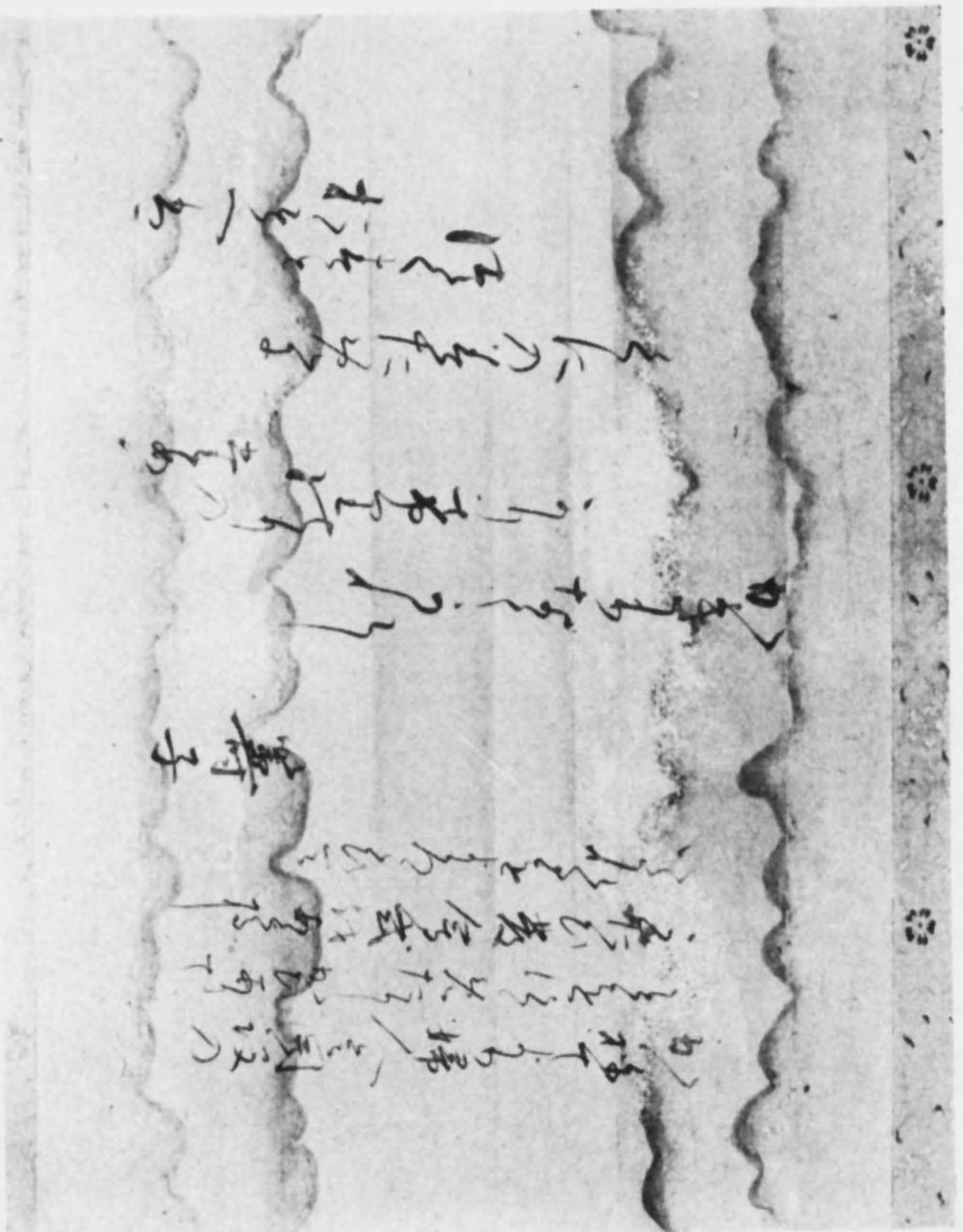
みすくは

まゝふんもつね

あすれのかきしと



像肖御殿院顔光裁總故



筆御殿院顔光裁總故

花のかをり目次

- 一、はしがき……………一
- 二、賑はしい除夜のお集ひ……………三
- 三、瑞氣みなぎる錦華殿の夕……………四
- 四、曉の夢を破る御不例の急使……………七
- 五、私を思ひ出して下さるならば……………八
- 六、いとも安らかな御臨終……………一〇
- 七、御入家當時の回顧……………一三
- 八、大谷家で家庭教育……………一三
- 九、英照皇太后陛下と御裏様……………一四
- 一〇、背の君の新門様御外遊と
明如上人の御遷化……………一六

- 一一、日露戦時及び戦後の御活動……………七
- 一二、聯合本部の創設と女學校の經營……………一六
- 一三、不惜身命の御活動が御病因……………二〇
- 一四、佛蹟御巡拜の御旅……………二二
- 一五、韋提希夫人の宮趾探險……………二三
- 一六、家庭の主婦としての御裏様……………二四
- 一七、御遺徳は輝く……………二七



花のかをり

一 はしがき

光顔院殿如性尼公が御往生遊ばしてから既に二十五年、御十一歳の時、大谷家の御縁女として御入嫁以來、御父君明如上人のふかき御愛撫のもとに御暮しあそばしましたたが、その御父上人の三十三回忌御法要と相並んで、光顔院様の二十五回忌御法要が今度勤修せられますのも、誠に有り難い御因縁と仰がれるのであります。

故總裁光顔院殿如性尼公の地上の御生涯は決して永くはなく、寧ろ御短い御一生と

二
申上ねばなりません。然しその多方面に渉らせられた御内容は、極めて豊富で御讃仰申上ぐべき事柄は實に数多いと拜承致して居ります。従つて斯様な短篇なものを刊行して、故總裁様の事どもを云々する事は、それがすでに恐れ入つた次第だとも考へられるのであります。然し厚い御信念から報恩の一路を示して、雄々しく進み行かれた故總裁様は、三十年後の現在日本婦人に當時すでに懇に進路を御指示になつてゐる様に今更御遺徳をつくくお慰び申上げるのであります。眞に故總裁様は何時の御代になつても眞宗教義の力強さを御示しになり、御佛の慈光の内に常に無爲に暮さず、報恩謝徳の經營を身口意の三業にかけて現實に顯はして、たゞ一途に御精進あそばし、本宗の教義に生育せらるゝ婦人としての最上の典型を永く御示し下されたものと仰ぎまつるのであります。

そこで恐れながら御在世の御遺徳を偲びたてまつる一端として當時ながく側近にお仕へ申し上げた時の室内部長上原芳太郎氏から、まだ世に傳へられて居ない數々のお話や、御臨終の御模様などを承はつたその一部分だけでもと存じ、せめて此の謹話を通して全国の我が佛教婦人會の會友方と、芳姿清香萬玉累積、實に御跡の大きい間より御心の花のかをりに觸れて、この御追憶を通して過ぎ去つた日の自分を眺め、無爲に消え去つた人生に御諭しの深みを改めて匂はさして頂き味はさして頂き、別しては故總裁様のおはします、お浄土の懐かしさを感じさせて頂きたいと思ふのであります。

二 賑はしい除夜のお集ひ

おもへば明治四十三年の歳末も押詰つた或る日の午後のことでありませぬ。今に残つてゐます元室内部の南向玄關へ突然自動車に着いた様子、當時京都にはまだ自動車は他に一臺もなかつたから、六甲の二樂莊からどなた様かお歸りになつたかとお出迎へ申すと、光顔院様(勿論我々は其當時は御裏様と申上げてゐます)は内地では珍らしい御洋装で下車せられました。阪神から京都へ自動車を飛ばすことなどは無い時分なの

で、「大變でございましたでせう」と申上ると、「路の悪いのには驚いたが、しかし愉快なドライブでした」と奥の洋館——錦華殿についで長い土間廊下を、鬢のほつれを掻き上げながらお進みになつて、一同に「御法主様は大晦日に御歸山よ、今晚は少し催し物があるから一同は歸らないやうに」と仰言つて奥へお入りになりました。

其の夜は南御殿で御裏様を始め、光明院下、積徳院様、武子さま、尊祐さま、其の他の方々で演技會が催され、實に賑はひました。一同は感心したり、腹の皮を燃つたりして後で御馳走まで戴き、私共も近年にない年忘れをさして頂き引下りました。

三 瑞氣みなぎる錦華殿の夕

明くれば四十四年の元旦、毎年の例とは申し乍ら、法要や御儀式萬端で、光瑞院下は頗るお忙しく、従つて御裏様も未明から袴姿で儀式に預られました。女儀方の御式は大概正午頃に済むので、紋服にお着換になつたあとで、院下のおめしかへや

御手廻りのお世話等遊ばしました。明如上人の御時代は建物も何も昔のまゝですから、上人のお世話話老女などが勤めたものですが、光瑞院下の御時代になつてからは錦華殿は平素婦人の氣もないから、自然と院下の御身廻りは専ら御裏様がなされたものです。

此の頃表の執行所や法務部の儀式は、總て古風に依られてあつても、奥の御祝事などは、簡素を主とせられ、たゞ元日の晩の會食ばかりは、昔風に擬へて取行はれました。院下が御繼職遊ばされて間も無く日露戦争がはじまり、平和克復後にも、戦後の御經營にお暇とでもなく、又、宗祖聖人の大遠忌を迎へられる御用意などに、大谷家の若い方々様も、自然その方の御用向で、歳暮年始を留守にせられる向もありがちなのに、當年のやうに方々様お揃ひで御越年遊ばすことは誠に珍らしいことで御座いました。先に挙げました外に、只今の婦人會總裁であらせられる紙子御裏様や、義子さまや梅上御夫婦の方々も居られ、他に執行と室内部長が食卓に陪し、新年の錦華殿の一

夕は、まことに花やかで、さながら瑞氣が立ち昇るやうでした。

献立は質素であつても、現今でも御用ひになつてをりますすが、唯一の古風を留める「公卿の肴」と申して、大三寶に奉書を敷き、中央に二本の雪持松を立て、其の根元に皆な鹽加減の貝、章魚、巻鰯、牛蒡、にんじんなどが、有職風に積み重ねてあつて、實にゆかしいものであります。御裏様は右の肴を一々小皿におよそひ分けになり、猥下を始め一同に配るやうに御指圖など遊ばしました。屠蘇一巡の後、右の公卿の肴を俗に「一里塚」と申す所から、話は一休和尚の道歌に及び、それから歳暮新年の吟詠を披露するものもあれば、御外遊中の新年の懷舊談も出て頗る賑はしい事でした。

酒も貰もお用ひあそばさぬ猥下は、大概一時間位で卓を離られる例なのに、當夜に限つて二時間ほど談笑せられ、御裏様も朗かに笑ひ興せられてゐました。そして御裏様は二回ばかり座を離れましたが、お椅子の左脇に座を占めてゐました私は、御裏様の御花やかな容色の内にも、何となくお氣色のすぐれぬ御様子を見上げたので、

失禮を忘れて何心なく、「おいくつに成らせられましたか」とお尋ね申上ると、「お婆さんになつてね、三十よ」とお笑ひになりつゝお答へ遊ばしました。

四 曉の夢を破る御不例の急使

さて賑やかなお席も閉され、私も退出歸宅して、熟睡した二日の未明、村田老女から急使が來ましたので、すぐ出勤すると御裏様は、昨夜半より御不例との事に仰天しました。

平素御館入の齋藤、小森兩醫師の外に、すぐ高山尙平、中西龜太郎の兩博士を迎へ診察申し上げた結果を承はると、「幸ひ御體温も低いから、此の分なら甚だしく御憂慮せられるに及ばぬかも知れないが、兎に角最善の途を講せねばならぬ」との事、御治療は醫家達に一任して、先づ猥下の御書齋を南御殿にお移し申し、錦華殿の方は醫家の詰所や宿直室を設け、洋館一棟を御療養専用と致し、御生母様も幸に京都にあ

らせられることとて、お泊りを願ふことになりました。

十日を過ぎた頃より、漸く御不良の御兆を拜するので、御里方の九條公爵様から、八木家扶を差向けられ、漏れ承はれば畏れながら御妹に當らせられる現今の皇太后陛下、當時の東宮妃殿下にはいたく御憂慮遊ばされる由、此の畏さに對し奉つても萬全を盡して御回春をお圖り申さねばと云ふので、西郷吉義侍醫と、濱田玄達博士の來診をお願ひすることになつたのであります。兩博士は寸時も東京を離れかねるとの事でしたが、たつて往復二夜一日の時間を割いてもらひ、朝夕二回御診察の結果を承はると、「御手當萬端に寸毫の遺憾なく此の點のみは満足する」との談に心細くも人事の限りを御盡しするより他は無かつたのです。

五 私を思ひ出して下さるならば

近年或る家で中西博士にお逢ひいたし、當時の事を噂したことでしたが、當時博士

は壯年で盛名があり、「彼のやさしいしかも大切な御夫人を何とかしてお助け申さねばならぬとの心から専念に手をお盡し致しましたが」と申された事でした、御裏様も博士が御病室へ入らるゝと大變御喜びになりました。そこで精根の限り盡力して下さつたのですが、御體温が四十度以上に昇ると、婦人會の大會に御臨場になつて御訓諭でも遊ばして在らせらるゝやうな事を口走られるかと思ふと、洋樂の譜を朗吟遊ばしたりなどせられるので、私どもは隣室で九條家の八木家扶等と御容態のみ御憂慮申上げて控へてゐました。そのうちにも御熱が下ると御精神は頗る明晰になられるから、此の分ならと一喜一憂を繰返したことでした。

或る日室内部長室に居ると、平素物に動せぬ慎ましやかな村田老女が、やゝ取亂した姿で入り來つたので、「何事」と驚いて聞くと、「只今御裏様が私の手をおとりになつて、斯様に仰せられました」とて、

子供の時から當家に來たのも深い佛縁でせう、前住様〔明如上人〕には

長い間御いつくしみを受け、有難い御法話を聴聞させて戴きまして厚い御教化を蒙りました。又當御法主様には深い御恩を受けてゐます、方々様にも千度可愛がつて戴き、皆にも厚い御世話になりました。私は満足して逝きます。此の後私を思ひ出して下さるならば、それを御縁として、御法義を悦ぶやう、あんたから皆に傳へて下さい。

とかやうです。何と申す尊い悲しいお言葉でせう、私共は尙四分の望みをかけて居ますのに、御當人様は立派に覺悟をなされてゐます」との事に、唯たい恐れ入り、感涙とお念佛の外はなかつたのであります。

六 いとも安らかな御臨終

二回目の食鹽水注射も、御吸收微量となり、二十六日には既に御危険期に涉らせられたので、醫家達は「最後の御治療を申上げる」との事でしたが、御腹部の固張は少し

も緩和せず、愈絶望となつたので、醫家達は「最早お樂にして差上げるが宜しからう」との事で、御縋帯や何かを御取除き申上げると

「あゝ、樂になりました」

と仰せられた御聲は、隣室で承はつてゐるものには、回春せられたやうに取られたかも知れませぬ位でした。そして狹下や方々との今生では最後の御挨拶や御話は、これから御旅行でも遊ばすやうなお軽い御氣分で、御念珠を手に遊ばしつゝ話疲れては瞑目して静かにお稱名を續けられ、又、お目をお開きになつては御法義の御話を遊ばして御法悦、お目を閉ぢられては又お念佛遊ばして、二十七日午前零時を過ぎて程なく、醫家は静かに頭を垂れて「恐れながら御臨終です」と告げられたが、それに私等は耳を疑ふやゝな氣分がして、寢臺の下に、よゝと泣き伏す看護婦達を、しばし夢心地で見詰めたぐらゐでした。この安らかな御臨終の御有様を見あげて、さすが大宗門の御裏様として死を見ること歸るが如しといふ、従容たる御有様は眞に信仰の力の偉

大さを、最後の御訓へとして御残し下された事と仰ぎ上げた事でございました。

御裏様の妹君は先に申上りましたが。姉君は山階宮菊麿王殿下の妃殿下にあらせられます、御裏様がまだお里方に在らせられました御幼年の頃に、御姉妹の姫君方と可愛いお袖を聯ねられて、築地別院へ御成りになつた其の頃より、遂に御往生のこの日までお仕へした私共が、幸ひ健康にめぐまれて、爰に二十五年の御法要をお迎へすることの出来たことを喜ぶと共に、當時の有様を回想すると誠に感慨無量です。

七 御入家當時の回顧

御裏様が、大谷家の御縁女として入洛せられたのは、御十一歳の九月下旬で、東京御出立前の参内には、畏き思召を以て、特に東御車寄より参上するやうとの御沙汰で、皇后陛下(後の昭憲皇太后宮)に拜謁仰付られ、兩陛下より貴重な恩賜と、畏れ多い御言葉を賜はられました。次の日御禮に参内せられると御内儀にて、皇后陛下は重ねて

拜謁を仰付けられ、後重ねて種々の拜領物があり、恐れ乍ら伯母君に當らせられる皇太后陛下(後の英照皇太后宮)よりは、四季の御衣服や数多い賜はり物があり、出發の際は新橋驛まで御使として女官を御差向あらせられる等、實に深重の御恩榮に浴されたのであります。

さて始めて本願寺に御着きに相成りました時は、南大玄關より黒書院に御通り遊ばし、こゝで内事局長より捧ぐる水晶のお念珠をみ手にあそばし、兩御堂に恭しく御拜禮の後、奥向の祝の御儀に移られたのです。此の日は青山御所より拜領の、絹縮紫ほかし菊水刺繡の御單衣に濃きの袴を御着けになり、大型のお兒鬘で、實にお愛らしう中に氣品の優れさせられたお姿であらせられました。

八 大谷家で家庭御教育

明如上人は、夙に女子教育を唱導あそばし一二の學校をも起された程であります。隨

つて御長女文子の方が、東京に留學せられるのには、一部の反對もありましたが、先づ下田歌子女史の堀江義塾に御預けになり、次で華族女學校に學ばしめられたこともありますので、今回も父上人の御考へでは、京都は一時の御寄留として、再びお里方にお預けになり、今まで通りに華族女學校に御通學せしめられたいとこの事で御座いました。然るに父君道孝公の御意見も御ありのため、それを御見合せになり、大谷家で家庭の御教育やら宗團としての御修養もあそばす事に改められ、百華園の東に「北のお方」といふ一廓の御建物を専ら御學事室に充てられました。後に御居室を百華園に御移し申上げ、武子の方ともく御學習あそばしました。普通學は夫々教師が參り、宗學は蓮居法岸氏を主任として、赤松連城、安國淡雲の兩老を輔佐に任せられました。

一〇 英照皇太后陛下と御裏様

三十年一月末、新門跡(光瑞親下)と御結婚の御豫定で、明如上人は九條公と御打合せになり専ら御準備を進められました。ところが同年一月畏れ多くも 英照皇太后陛下崩御あらせられたので、一先づ御延期となりました。

崩御前に御重體との内報が九條家より傳へられましたので急ぎ御東上あそばしました。少時同家にて御所の御模様を窺はれてゐると、青山御所より御電話があり、すぐ參上せられました。御所御門内の木立は夕靄に包まれ、御殿内の電燈は晝を欺くやうに照り輝いてゐました、人聲一つもせぬ物靜かな御廊下を奥に進まれ、一時間半も経つたかと思ふ頃、沈みがちにも物音が洩れ聞え、やがて恐れ多い御發表を拜承致しました次第でございました。後に洩れ承はりますると 皇太后陛下は、「籌子か」云々の御聲をかけさせられ、それが最後の御意であらせられたと申すことで、甚だ畏れ多い事に存じ上げます。

右の次第で御婚儀は一ヶ年を御延ばしになり、翌三十一年一月末に擧げられました。此の時御依用の御柱は、嘗て厚い思召で、青山御所より賜はつた御品でありました。

が、明如上人に次の御感詠があります。

青山に 今しいまさは いかばかり うれしとおぼさん けふのことほぎ

一〇 背の君新門様の御外遊と明如上人の御遷化

三十二年十二月、光瑞親下は御渡歐の途に就かれました。翌三十三年春に明如上人は、再び御全快もむつかしいかと危ぶまれる御大患に罹られましたので、萬一に婚期を逸してはと、御長女文子の方は、急ぎ眞宗高田派の新門跡御裏方として、常磐井家に御入嫁せられました。然るに幸にも上人の御病氣は夏秋の頃より御快癒に向はれたので、御裏様は外遊の背の君と、御二人前の御孝養をお盡しになり、宛も上人の御秘書役を御勤めあそばす趣がありました。光瑞親下の御渡歐の際に萬一の場合をと明如上人の思召しから成つた御遺書も、御裏様に御預けになつたほどであります。

三十六年一月明如上人御遷化遊ばし、光瑞親下は急いで御歸朝の途に就かれました。

三月中旬御歸山なりますと、先づ上人の御病床に衣帯も解かずに御看護に盡された御裏様は、事細かに當時の御有様を御報告遊ばす御模様を拜した吾れ、御席に在る者は、その御孝心の厚きこと、御責任感の御深きことに涙を新にした事であります。是よりいよく大法主夫人として、一派一山の上に立たれたのでございました。

一一 日露戦時及び戦後の御活動

三十七年一月、日露の國交は窘迫の状態となりましたので、豫てから御奉公の志に燃え立たれた大法主光瑞親下は、忽ちに臨時部を御開設になり、御寢食を忘れて眞俗にわたり細大となく事務を御自ら執掌せられました。二月には宣戦の詔勅が煥發せられました。連戦連勝の報は傳はつても、平和克復は前途遼遠の見込であり、國民の一大覺悟を要する秋でしたから、一派一山を擧げて大活動を開始されたのであります。今はすべてを略すこと、致します。三月に入ると御裏様は初めて訓諭を發して

全門末の婦人に呼び懸け、一派婦人に總動員令を下されたのです、此の時の御示しに左の歌を添へられました。

「をみなとて すめらみくにの 民なれば つとめざらめや はげまざらめや」。

是より御裏様は綿服で諸國を御巡回遊ばし、日本婦人としての活躍を御聲を大にし、叫ばれ、更に傷病兵や軍人の遺族や軍隊の慰問等を行はれて、婦人に奉公の範を垂れさせられ、又門末の婦人に對しては、本宗婦人として軍國に處すべき要務を説き聞かせられ併せて婦徳の涵養を奨められたのです。而して平和克復後には、戦後に於ける社會事業を奨励あそばし、御指導に力をつくされました、これがやがて今日のやうな隆運に向へる、我が佛教婦人會の基礎となり、或は女子教育の隆盛となつて現はれたのであります。

一二 聯合本部の創設と女學校經營

尤も明如上人の御時にも婦人會は有り、三府などには、有力なる婦人團體が出来て居ましたが、未だ普及の域に達して居らず、又、全國として見れば、一地方に局限せられて居る嫌ひがあつたので、こゝに統制機關として、京都に佛教婦人會聯合本部を御設けになり、これが總裁として會の普及と發展の爲めに、御多忙の中から殊更に宗門の爲めに御勞苦を顧みず、南船北馬の旅をお続けになつたのであります。

右の次第で機運は頓に勃興して、宗門の婦人團體として一大勢力となつた爲に、聯合本部の第一次の事業として、女子教育を盛んならしめんと、こゝに女子大學の創立を發起せられ、力を専らその準備と調査に御傾倒になりました。此の當時未だ女子教育の振はなかつた時代に、國家社會にも大なる拍車をかけられたのでありましたが、本山として開教其の他教線擴張上頗る多事であつた爲、總裁様の思召も總ては宗祖大遠忌の後に委ねる事となつたのであります、その大遠忌もわづか二三ヶ月の後に迫つて來たのに、其の御盛儀にもお値ひにならずして、數多の御希望を残して御往生に

なつたのは、此の世の習ひとはいへ、かへすくも遺憾なことでございます。

ことに京都の東山にある京都高等女學校や東京千代田高等女學校の創立には實に並々ならぬ御苦勞を致されたもので、又大阪の相愛高等女學校へも屢御獎勵に赴かれたやうな次第で、右等の學校の教職員や、出身者や現に學ばれつゝある生徒諸姉は、今回の二十五回忌の御法要に値遇して、とりわけ御遺徳を追慕せられる事と存じます。

一三 不惜身命の御活動が御病因

三十九年七月、猥下は新領土の樺太視察と、北海道御巡化に上途せられ、御裏様も御同行にて蒙味の境を御跋涉遊ばし、殊に北海道の婦人會獎勵の旅を御續けになり、九月に御歸山なりました。同月下旬猥下は、教線擴張の爲め御渡清せられるので、復御旅行を俱にせられました。當時の支那は今日の様に鐵道も開けて居ず、殊に奥地に入つて名利、名所を探られる爲めには、随分と男子も堪へ難い御旅行をお續けになり、

又、香港、上海、杭蘇、漢口、北京を経て、清室の兩宮に謁見、ついで關東州に至るまで、内外の女流とも御交際遊ばし、併せて婦人會の發展を圖られました。

翌年四月御歸朝後も引續き内地及海外開教地の婦人會の發展に御心を注がれ、席暖まるに違もない御有様でありました。ところが御裏様は數年前より御胃を害されて、三十九年一月御里方の父君道孝公が薨去せられ、京都に御移葬の際も御柩に隨ひ給ふを得ず、御涙を飲んで東京で御見送りを遊ばし、長與博士から治療を御受けになつたのです。これは内地御巡回の際、御心身餘りにも御過勞の上に、御食時の不整などが誘因をなして尙一弛一張の症狀におはしたのであります。

一四 佛蹟御巡拜の御旅

大法主光瑞猥下には御繼職以來、宗運發展と共に大事が續出して、御不眠の場合も多く自然神經衰弱の御惱みもあり、如何に精力絶倫の猥下でも、此のまゝ大遠忌を迎

へられるのは、御健康上如何と思はれますので、醫家の切なる御勸告を御用ひになり
四十二年九月、印度歐洲を巡遊遊ばすことになり、今度も御裏様と御同列と云ふ事
なつたのであります。

雪山の麓カシユミル國の秋色に、大に御健康を回復せられたお二方は、是より印度
に南下して、佛蹟を御巡拜せられたのでした。此の時大阪毎日新聞社の特派同行記者
關露香氏は、紀行の内に、

自分の様な粗野な者でも、熱帯野蠻の旅行に辟易してゐるのに、深窓に生長された
夫人壽子の方が、侍女の一人も伴はず、山川を跋涉して陋屋に寢食し、時には汗び
つしよりになつて、自ら行李を始末せられるなどは、誠に見る目も氣の毒と云へ
ば、光瑞猊下は、

他國の旅行なれば兎も角も、印度は止せと云ふと「印度に文明國の婦人や子供は住
んで居ませぬか、居るならば私とても」と申すので……と言はれたが、夫人の

元氣旺盛には、たゞ／＼感服する外は無い
と書いてあります。

一五 韋提希夫人の宮趾探險

印度は猊下三遊の地だから、局處的に深く探查せられる御方針でおありでしたが、
御裏様は初遊の御事ですから、成る可く廣く御巡歴せられる爲め、屢猊下の本隊と
離れられました。随つて王舎城の御滞在期も短く、明朝出立と云ふ前日、陽も早傾い
た頃御裏様は急に「これから摩揭陀王宮趾を訪ひたい」と申されるので「滅相もない事
でございませす白晝でさへ猛獸の危険がある所でございますのに、やがて日も落ちさう
な今頃から」と申上げると

王舎城へ来た目的の半分は靈鷲に登つてそれを達したが、女人往生の先達の、韋提
希夫人の宮趾を尋ねなかつたならば、半分の目的を棄てる事になりますから……」

と申されるので、随員は思召を伺つて見ると有がたい事でありませうから御案じ申しながらからお供をされると、荆棘を分け、密林を穿つて、山に御登りになり、廣い區域の古代建築の遺礎を、心行くまでに見廻られ、路なき路の傍らに、血の生々しい獸骨を御發見になつても、さして御動じの事も無く、下山せられると遙か彼方の無人境に猯下御一行の天幕に燈を見る時であつたさうです。

印度から改羅、エルサレムなどの地中海の名所を尋ね、歐洲諸國を遍歴せられて、猯下は印度洋を経由、御裏様は西比利亞線により御歸朝なつたのは、四十三年十月の初めでした。

一六 家庭の主婦としての御裏様

かやうに海外に出られては、男子も及ばぬ勇敢と申上げてよいやうな大旅行をせられ、内地では絶え間のない程に諸方を巡回せられて、御法義御引立のために大活動を

續けられました。そして一面に御裏様は内にあつては實に家庭に於ける主婦としての御責任を遺憾なく果された方でありませう。尤も奥向には老女や侍女はありますが、時勢の變化が餘りに急激であつた爲め、例へば物の稱呼さへも辨へぬ事もあるので、事の大小となく、皆ことごとく御裏様に蟠集するのです。されば宮城や御所の季節毎の奉伺も、女官宛の御文は自ら御認めになる事は無論の事、猯下のお手廻りは殆ど一手に御引受けあそばしました。

更に大谷家としては、最も重んずべき義の母君の心光院様や、同じく祖母君の蓮界院様のお二方が成らさせられるので、如何にして御老境を慰めんかと御心を碎かれる御有様、その御孝心の深くあられた逸話も少くありません。又猯下の御兄弟方は申すに及ばず御預かりになつてゐられる近親連枝の身廻りに、御心を細かく配られねばならず、更に多くの御親族向きの御交際のみでも中々容易の事ではなく、我々の小家庭から推し測つても、大抵の御氣苦勞ではあらせられなかつたと拜察せられるのであります。

殊に新門様の御裏様として且つは將來に御自身の御跡を御繼承遊ばすべき即ち只今の總裁様紙子御裏様を御十五歳よりお迎へ遊ばし、細大となく御相談の御相手と遊ばし、又武子様の九條男爵家に嫁がれるに就ても、其御交渉を始め御準備萬端を、全く御母儀の御氣分で何から何まで御世話を遊ばされ、更に幼い義子の方の御教養にも御心を盡される等、然かも斯様に御多忙な餘暇には英佛語を學び、和歌を詠じ、書畫を習ひ、花果を養ひ、音樂を愛し、そして朝夕には、奥の御内佛で必ず御自ら御調聲で正信偈御和讃を、不斷に讀誦あそばし御代々の御命日や御親族の御忌日には一層御丁寧な御拜禮でありました。

されば御裏様は一派法主の御夫人として、又、大谷家の御主婦として、精力絶倫、十方無礙の猊下の御良配として、實に天下唯一人の得がたい御方と申さねばなりませんのでした。

一七 御遺徳は輝く

御裏様御重態の報が沼津御用邸に在はします 皇后陛下の御聴に達し、香川皇后宮大夫より 畏い御尋の御沙汰を傳へられ、又 皇太子殿下並に 妃殿下より木村武官長を以て、御尋ねとして御菓子を賜はる旨達せられ。遂に御往生の後 皇后陛下より御菓子三種 皇太子並に 妃殿下より御菓子三種。又、喪中御尋ねとして 皇后陛下より御料理百人前 皇太子殿下並に 妃殿下より御料理百人前と清酒一樽を。更に 皇后陛下 皇太子殿下 皇太子妃殿下 皇孫殿下より御花各一對を賜はり。又御葬儀の節は 皇太子殿下並に 妃殿下の御代拜御來臨があり、其の前後に更に 皇太子妃殿下より御使を御差向相成り、御花、御菓子を賜はつた事どもは、常に御裏様お一方の事に止まらず、實に一派一山の光榮として、永く感佩し奉るべきこと、存するのであります。其の年の三月二日大谷御本廟で盛大な御葬儀を御執り行ひになり、三月十六日の御

納骨式には近親の方々も参列せられ、私は勤仕の一人として、お墓の立つまで二三時間の内に、尊號の六字を頭に置き、拙い六首の腰折に感想を詠み、本山に歸るとすぐ武子の方に呈しました。すると其の使を待たせて置かれて、同じく六字を頭に置いた六首の歌を下されました。その第三首に、

阿まりにも 花のいのちの みじかさに うらみも深し 春の夕風

とあります。只今思ふと弔ひ弔はれた御二方とも、お歌の通り花の命のあまりにも御短く涉らせられたのは、惜みても餘りあることですが、せめて光顔院様が嚴淨院様(武子夫人)の齡まで永らへられたならば、一層大きい躰を残されるものをと、實に残念に堪へませぬ。

しかし御半生の尊い心血を傾け注がれた佛教婦人會は眞の御妹君にあらせらるゝ現總裁様や故嚴淨院様のお力と相俟つて、今日のやうに盛大となり、又、嘗て獎勵張遊ばさせられた三都の女子教養機關の事業は、彌榮えて行く現状であることは故

總裁様の御精神の御かをりが形の上に残り輝いて行くので、私共はかゝる御遺業を通じて御遺徳を仰ぎまつると共に、その御遺志その儘を御繼承遊ばし、日夜に一派宗門の婦人の上に御心を懸け遊ばす、現總裁様の御心を奉戴して、眞俗にわたり努力御奉公せねばなりません。これが今回の御法要を迎ふるものゝ第一の覺悟であると信じます。

『大谷家の方々様の調度品などに御銘々の「しるし」を用ひられ、光顔院様は「杜若」印でありましたから表紙にも彼の花を用ひました。』

『此の編輯に際し、現總裁様より冠頭に掲げた、御題詠を賜はりました事をありがたく存じます。尙又前の室内部長たりし、上原芳太郎、同じく痴山義亮兩氏、及び現室内部長柱本瑞俊氏の御助力を感謝致します』………本空合掌

昭和十年四月五日印刷
昭和十年四月十一日發行

編輯者

宇野本空

印刷者

京都市下京區西洞院七條南
内外出版印刷株式會社
代表者 須磨勘兵衛

發行所

京都市堀川通本願寺
教務局布教部

終

